〔書評・文献紹介〕

Peter Demetz: Böhmische Sonne, mährischer Mond. Essays und Erinnerungen.

佐々木 茂 人

マレク・ネクラ(Marek Nekula)の『フランツ・カフカの言語』(2003年)は、カフカのチェコ語テクストの分析を通して「チェコ的カフカ像」を提示した労作であるが、図らずも従来のドイツ・ゲルマニスティークの問題点をも浮かび上がらせた観がある。叙述に用いられた膨大なチェコ語文献――そのほとんどが近年のカフカ研究に見られないものだ――が、ドイツ語圏のゲルマニストとチェコのゲルマニストの間の、ある種の不通状態を示唆していると考えられるのだ。日本のゲルマニストも、他ならぬドイツの研究傾向に追従してきた。ことは決して対岸の火事では済まされまい。カフカのみならず、他のプラハ出身のドイツ語作家にしても同様の問題が想定されよう。近年とみに進捗が見られるカフカ研究にしてこの有様なのだから。

同じ問題意識は、ペーター・デーメッツの1990年代のエッセイを中心にまとめた本書にも底流している。リルケの初期の詩に描かれた「放浪者」あるいは「異端者」にフスの影を読み取り、その起源をチェコの詩人カラーセク(Jiří Karásek)とのつながりに求めるエッセイ、カフカの掌編『市の紋章』に、コスマス年代記のバビロンおよび30年戦争後じっさいに行われた市の紋章の変更などを重ね合わせる小論――いずれも、チェコの側からドイツ文学を語る試みである。同じく、ベルリンの壁崩壊とビロード革命における指導的文人の役割を、「体制批判者」と「野党」との関係に着目して比較した文学論、日本でもなじみの深い「シュヴェイク」の、イデオロギーに染められた受容史をチェコとドイツで比較した論考、プラハの「魔術的な」イメージ形成を歴史的に検証し、ノスタルジーに秘された両義性――反資本主義のカモフラージュと観光商品としての価値――を暴いてみせる随想、これらにも、チェコ史への造詣の深さと、それに偏らない優れたバランス感覚が窺える。

とはいえ、このようにドイツ文学とチェコとのテクスチャーを織り上げる視点が、机の上の研究で獲得されたと考えてはならない。デーメッツ自身チェコ現代史の複雑なプリズムとしてドイツ文学に対峙せざるを得なかったのだ。1992年にドイツ系の父親とユダヤ系の母親の間にプラハで生を受けたデーメッツは、移り住んだブルノ(ドイツ語では Brünn)ではドイツ系ギムナジウムに通っていたが、母親の希望でチェコ系ギムナジウムへ転校(その後、母親はユダヤ系の医師と再婚、家ではドイツ語が用いられた)。ミュンヘン協定後のドイツ占領下はチェコで過ごし、戦後共産主義の圧政が厳しくなっていく1949年に亡命、一時ウィーンに居を構えた後、アメリカへ移住する(現在エール

大学で教鞭を振るう)。本書の冒頭に掲げられた、唯一 1960 年代発表の『歯軋りする希望を胸に』には、プラハの春とその挫折が、カフカの「測量士」とシンクロする一亡命者の目を通して淡々と描かれている。『ブルノの遊歩者 1938 年』では、多言語状況で過ごしたギムナジウムの学生時代から国外脱出までのいきさつが、『困難な帰郷』は、ビロード革命の朗報に際して帰国を果たすも、新しく見知らぬ姿を見せるプラハに自分の「足跡」を見出せない悲哀が、それぞれ描き出されている。

出自の問題、多言語状況に付随する苦悩に加え、戦間期から戦後へかけてのさまざまな辛酸――それだけに、いや、それにもかかわらず、デーメッツがマサリクに馳せる想いは格別である。「人生がマサリクの共和国とその自由主義的原則と一体である」と信じた少年は、ゲシュタポに拘束されても、「半ユダヤ人」の強制労働所にいても、「そのイメージを変更する理由はなんら見出せなかった」。その信念はマサリクの『ファウスト』受容を論じたエッセイにも反映している。マサリクの読解に一貫したカトリックのイデオロギーを看取しつつも、同時代の宗教的解釈の陥穽およびドイツのゲルマニストの解釈の民族主義的傾向を回避できた点を高く評価しているのだ。しかし、当のマサリクが熱心な「民族主義者」であったこと、その理念をもとに創られた第一共和国が、スロヴァキア人との対立やズデーテン・ドイツ人などの少数民族問題を抱えていたことは周知の事実である。「ハプスブルク神話」ならぬ「マサリク神話」が、この亡命者にも深く根を下ろしていはしまいか。

デーメッツの業績に対しては、すでに 1992 年、『ヨハン・ハインリッヒ・メルック賞』が授けられている(受賞の挨拶も本書に所収)。だが、長らく封印されてきたマサリクの歴史的検討も含め、本書の重要性と問題性が十全に認識されるのは、まさにこれからなのかもしれない。

(Deuticke 1996)